
おばあちゃんは優しいゾンビ

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばあちゃんは優しいゾンビ

【Nコード】

N2984Y

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

優しいおばあちゃん。でも、ちょっと普通とは違っているおばあちゃんはゾンビなの。

うに蹴りを入れた。

Iggggyyyuuuiiii

ゾンビ老婆は一步だけ下がったが、腹のナイフは全く気にならな
いらしい。しかし、抜こうともせず、濁った目で女を見ている。

「おばあちゃん！ 噛みつき！」

GGGRRRRUUUAAAAUU
UUU-!

ゾンビ老婆はいきなりダッシュして、女の肩をつかむとその首筋に噛みついた。

「ブギウワアアアアアアアアアア！」

女は叫びを上げ、血が噴水のように噴き出した。ゾンビ老婆は首の肉を食いちぎってそれを飲みこみ、さらに二回三回と女の首筋の肉を貪っていく。

「おばあちゃん！ 止め！」

声に反応して、ゾンビ老婆は貪るのを止め、女から手を放した。

女はその場に崩れるようにして倒れた。

bruguuuuu

血でその身を真紅に染めたゾンビ老婆はおとなくなつた。

「じゃあ、おばあちゃん、行こ」

二人がその場をさると、残されたのはうずくまつた状態で手首から血を流してピクピクしている男と、首筋がずたずたにされて痙攣している女だけだった。

優しいおばあちゃんとお肉屋さん

「こんにちはお肉屋さん」

少女とゾンビ老婆は肉屋に来ていた。

「いらっしやい！」

腕髪がもさもさでエプロンをかけた中年の男が二人を出迎えた。

[illegible]

「おお、婆さんも元気そうじゃないか！」

中年の男はゾンビ老婆に愛想良く笑いかけた。ゾンビ老婆はそれに臭い息を吹きかけるが、中年の男は動じない。

「さて、今日は何を買いに来たんだい！」

「はい、これ」

少女は一枚の紙を中年の男に手渡した。中年の男はそれを受け取り、読み上げ始める。

「えー、なになに。豚の肩ロースブロックで五百グラムに鶏の胸肉四枚、それから合い挽肉を五百グラムと、それから血の滴るような新鮮な生きた肉と」

それから中年の男はシヨウケースの奥に入り、手袋をして肉を取り出し始めた。それぞれの肉を包み、次々に並べていく。

「さて、あとは最後の肉だな」

Grucioo

そこでゾンビ老婆がシヨウケースを飛び越えて中年の男に飛びかかり、まずは腕に噛みつこうとした。

「おばあちゃん、ストップ！」

少女の声でゾンビ老婆は動きを止めた。中年の男はゾンビ老婆をどかし、立ち上がった。

「相変わらず本当に元気な婆さんじゃないか」

「ごめんなさい。おばあちゃんはずっと元気がよすぎるころがあるの」

そう言つて中年の男は牛の塊肉をゾンビ老婆に差し出す。ゾンビ老婆はすぐにそれにむしゃぶりつくと、あつという間に食いちぎりながらそれを胃袋に収めていく。

少女はその光景を微笑みながら見守り、中年の男は並べておいた肉を袋に入れていった。それからその袋を差し出し、少女はそれを受け取る。だが、その中身を見て少女は首をかしげた。

「ああ、それならちよつとついてきてくれよ」

中年の男は店の奥に入っていく、少女とゾンビ老婆もそれに続く。そのまま店の裏庭に行くと、そこには鶏が二羽うろうろしていた。

「どうだい、こいつをこの場で絞めてやれば新鮮だろ」

「uuugyuuaaaaa」

ゾンビ老婆はなんとなく嬉しそうに聞こえるうめき声を上げた。

「よかったねおばあちゃん。さあ！ 噛みつき！」

G
r
r
r
r
r
r
r
r
u
o
o
o
o
o
o
o
o
o
o
o
!

歡喜の雄叫びに聞こえるものを上げながら、ゾンビ老婆は鶏に襲いかかった。腐りかけのような体に似合わず、老婆は俊敏な動きで鶏を捕らえると、その頭を齧りとつた。

それから鶏の首に食らいつき、それを逆さまにしてまずは血を勢いよくすすする。

「さっきはおあずけしたからまだお腹が減ってるのね」

「なんだい、ここに来る前にもなんかあったのかい？」

「そうだけど、でも、お使いがあつたから急いで来たの」

「そうかい、そいつは偉いなあ」

二人がなごやかに会話しているうちに、ゾンビ老婆は鶏の羽を引きちぎりながら、その胴体にむしゃぶりついて骨ごとバリバリ食べている。

そして数分すると、二羽目の鶏に襲いかかり、今度は足を持って

引き裂き、貪りだす。いい加減裏庭には血と羽が飛び散り、ゾンビ老婆は血まみれになっていた。

だが、なぜか少女も中年の男も和やかな雰囲気で見守っていて、不思議と凄惨な現場とはなっていないかったのだった。

優しいおばあちゃんの徘徊

夜、自宅に戻っていた少女とゾンビ老婆は食卓についていた。

「今日はママが遅いから、先に食べちゃおうね」

「brrrruooooooooo」

ゾンビ老婆はうなりながらテーブルに両手を突くと、少女は鍋から何かの塊をすくって皿に乗せた。

「はいおばあちゃんはこれね」

何かの塊が乗った皿が目の前に置かれると、ゾンビ老婆は何も言わずにそれにむしゃぶりついた。ずるずるぐちゃぐちゃ音をたてながらあつという間にたいらげてしまう。

「gyooooooooo」

ゾンビ老婆は頭を皿に小刻みに打ちつける。

「おばあちゃん、食べすぎは駄目だよ」

少女は素早く皿を取り上げてしまった。ゾンビ老婆はそれでもテーブルに頭を打ちつけるのをやめない。

「めっ！ おばあちゃん」

少女は精一杯怖い顔をしてみせた。ゾンビ老婆はなんとなくがっかりしたような雰囲気になったが、次の瞬間には勢いよく体を起こした。

「Juyubooooooooaaaaa」

そしてゾンビ老婆は走り出し、窓を突き破って外に飛び出していた。

「おばあちゃん！」

少女はとりあえず玄関から靴を取ってきてその後を追った。

「poryyyyyyyyyyyyyy」

ゾンビ老婆は叫びながら走り、犬を散歩させている中年の男に飛びかった。

「うわ、な、なんだ！」

男はゾンビ老婆に気づいて叫び、犬はおびえて後ろに下がる。もちろんそんなことは何の意味もなく、ゾンビ老婆の手が中年の男の首を捉える。

「Vryuurooooo!」

ゾンビ老婆は中年の男の首を握る手に力を込めた。その首は嫌な音をたて始め、無理矢理右回りに回転させられていく。

「う! ぎややめ! ぎぎぎぎぎ!」

断末魔の叫びと共に、中年の男の首が鈍い音を出して回転した。一瞬でその顔は真つ青になり、膝からその場に崩れ落ちる。

ゾンビ老婆はさらに首を回し始めたが、犬はキャンキャン言いながらその場から逃げていった。後に残ったのは、首がねじ切られる音と、血と肉をすすする音だった。

それから数分後、少女は中年の男だった残骸を発見していた。

「おばあちゃんったら、拾い食いは駄目だって言ったのに!」

少女は大人びた雰囲気のため息をつき、その場を後にした。

そしてゾンビ老婆は夜の町を徘徊していた。夜なので人通りが少ないのが幸いして、今のところ犠牲者はさっきの中年の男一人だけだった。

「oooooooooooooooooooo」

ゾンビ老婆は叫び、全力疾走を始めた。そして、公園に到着すると手近な木に突進する。頭から激突したが、さすがに木を倒すほどの力はない。

「kyugyoooooooooooo」

ゾンビ老婆が雄叫びを上げると、それに驚いたアベックやらなんやらが顔を上げ、ゾンビ老婆の姿を見て勢いよく逃げ出していく。

ゾンビ老婆はそれらを追うことをせず、ただ周囲を見回している。

「おばあちゃん!」

そこに少女が走ってきた。

「mussyryuuuuuu」

ゾンビ老婆はおとなしくなり、その場で立ち尽くした。少女はそ

んなゾンビ老婆の手をとる。

「おばあちゃん、帰ろう。お夜食も用意してあげるからね」

「g y o u w a w a u i o y o y o !」

ゾンビ老婆は歡喜の雄叫びのようなものを上げて、少女に従った。

優しいおばあちゃんとおまわりさん

ある日の昼、少女とゾンビ老婆は買物に出かけていた。その途中自転車に乗ったパトロール中の警察官が道の向こうからやってきた。「こんにちは」

少女が挨拶をすると、警官は自転車を止めて笑顔を浮かべた。

「はいこんにちは。おばあさんも元気そうで」

「bbbooryuuuooiuiuu」

ゾンビ老婆はよだれを垂らしながら返事をした。

「qrryuuuooopp」

さらにゾンビ老婆は自転車のタイヤに噛みついて、それを食い破ってしまう。

「おばあちゃん、そんなもの食べちゃ駄目」

少女はゾンビ老婆の襟をつかんで軽く引く張った。

「ooooooooogyuuuuuu」

ゾンビ老婆はもがきながらも、一応自転車から離れる。少女は警察官に頭を下げた。

「おまわりさんごめんなさい。おばあちゃんがタイヤ食べちゃって」

「なに、これくらい大丈夫さ」

そう言って警察官は手を振った。だがそこに。

「Gyuruuuuuu!」

ゾンビ老婆が手首を飲み込むように食いついた。

「うぎゃああああああああああああああああああ!」

警察官はゾンビ老婆を振り払おうと腕を振ったが、ゾンビ老婆の食いつきは強烈でむしろ歯が食い込んで行く。

「ううわおおおおあ! おつぶおおうつつこお!」

意味不明の叫びを上げながら、警察官は拳銃を抜き、がむしゃらにゾンビ老婆に撃ちこんだ。

「kyuru! gooryuu! pero! boyuu!

oppouio！」

しかし五発の銃弾を撃ちこまれても、ゾンビ老婆はうめくだけで噛みついた手を放さない。そして、ゴキッという鈍い音がすると、警察官の手首は噛み千切られた。

「ぎょおおおおおおおおお！」

警察官は拳銃を取り落とし、血を噴き出す手首を抱えながらうつろくまった。ゾンビ老婆はそれを見もせず、ただ手首をゴリゴリ咀嚼している。

「おばあちゃん、駄目じゃない。おまわりさん困ってるでしょ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゾンビ老婆は相変わらず手首を噛み砕いているが、おとなしくなった。その間にも警察官は蒼白な顔色になり、すでに声も出せずぴくぴくしている。

「おまわりさん、ごめんなさい。おばあちゃんはちょっと食いしん坊なの」

それから少女は警察官が落とした拳銃を取り上げる。

「でもこんなもの危ないと思うの」

そして少女は拳銃を放り投げた。

「じゃあおまわりさん、またね」

少女とゾンビ老婆は立ち去り、後に残ったのは血だまりに倒れる警察官だけだった。

しばらくして、そこを通りかかった人の悲鳴が響いたりしたが、それはまた別の話で、特に少女やゾンビ老婆に影響を与えるようなことでもなかった。

優しいおばあちゃんと商店街

「b y b y b y b y b y b o o o o o」

ゾンビ老婆は商店街の様々な店を見て上機嫌らしかった。先に歩いている少女はある店の前で足を止める。

「おばあちゃん、私洋服が欲しいな」

「m i y o u o o o o o o o o」

ゾンビ老婆は穏やかにうめいて、少女に引つ張られるままに店に入った。

「いらつしゃいませ」

気の良さそうな中年の女性の店員が二人を迎える。

「o g y u o o o u i o o o o」

ゾンビ老婆は店内の服を引つ張ったり齧ったりしている。だが、店員は笑顔でそれを見ているだけだ。

「あらあら、相変わらずお元気ですねえ」

「k y o k y o k y o k y o i k u o i」

店員の言葉にゾンビ老婆は喜んでいるらしい。少女はそんな二人を差し置いて並んでいる服を見ている。そして少女は棚の上の帽子を手に取った。

「これ素敵」

少女は帽子を頭に乗せて見せる。

「n i g y u u u u u u u u」

ゾンビ老婆は喜んでいるらしい。

「よくお似合いですよ、お嬢さん」

店員も少女を褒める。するとゾンビ老婆は自分の口に手を突っ込んで唾液まみれの札を取り出した。

店員は営業スマイルのままそれを受け取り、レジに入れるとお釣りを取り出した。それは少女が受け取り、自分の財布に入れてしまふ。

「お買い上げありがとうございます」

店員に見送られ、少女とゾンビ老婆は店から出て行った。それから二人は引き続き商店街を歩いて、魚屋の前まで来た。

「G y u u u u u u u u u u !」

ゾンビ老婆はいきなり店頭のカツオに食いついた。

「おお！ 相変わらず元気ですねえ！」

魚屋の親父はゾンビ老婆をとがめるどころか、機嫌が良さそうだった。少女はさっき買った帽子を取ってから、行儀よくお辞儀をする。

「こんにちはお魚屋さん」

「はい、こんにちは。きょうはまたかわいい帽子をしてるねお嬢ちゃん」

「うん。さっきおばあちゃんに買ってもらったの」

笑顔で言う少女に魚屋の親父もつられて笑顔になる。

「そいつはよかったなあ。お嬢ちゃんがかわいくなって、きっとお婆さんも喜んでるぞ」

「B o y g y o g y o g y o u g j o j o j o」

ゾンビ老婆はカツオから顔を上げて満足げなうめき声を出した。だが、すぐにまたカツオを貪ることに没頭する。

「はっはっはっはっは！ 相変わらず健啖家だなあ！」

豪快に笑いながら、魚屋の親父は手を叩いた。

「ところで買物にきたんだらう？ 魚のことならうちにおまかせだ！」

「ええと、これお願いします」

少女はメモの書かれた紙を差し出した。魚屋の親父はそれを受け取って一瞥するとすぐにうなずいてみせる。

「よしきた！ ちょっと待っていてくれ」

魚屋の親父は魚を何種類か手にとって店の奥に入ると、それをおつという間にさばいて、丁寧に包んだ。

「はいよお待ち！」

袋に入ったそれを少女は両手で受け取る。

「ありがとうございます。はい、お金」

「はいまいどあり！」

差し出された札を受け取った魚屋はすぐにお釣りを少女に返した。

「じゃあおばあちゃん、いこ」

少女が声をかけると、ゾンビ老婆は魚の肉片をつけた顔を上げた。

「kyuuyuroruro」

うめいておとなしく立ち上がると、ゾンビ老婆はおとなしく少女の後ろについた。

「さようなら、魚屋さん」

少女は手を振ってそこから立ち去った。それを見送った魚屋の親父はうなずきながらつぶやく。

「いやー、それにしてもあの婆さんはいつも元気だなあ」

優しいおばあちゃんと泥棒

その夜、ゾンビ老婆は徘徊することもなく家でおとなしくしていた。少女の家の者は全員寝静まっていて、わずかな音しかない。

だが、小さな高い音が響き、窓ガラスがくりぬかれた。そして腕が窓ガラスの鍵を外し、音もなく一人の人影が居間に入り込んだ。できた。

その人影は慎重に進んでいって、居間にある小さな棚を漁り始める。だが、そのマスクで表情を隠した顔は浮かない様子だった。

「ちっ、しけてやがんな」

どうやら、現金や金目の宝石類などは見つからないようで、悪態をついている。しかし、そこで足音が響き、泥棒は動きを止めた。

「gyuiuyoiopoiuoiui」

妙なうめき声が夜の静かな家に響く。泥棒はその声に金縛りにあったかのように動きを止めた。ピタピタと夜の静けさの中に不気味な足音が響き、泥棒のいる部屋のドアに人影が映る。

「・・・」

泥棒は息を殺してじっとしている。そうしていると、人影は再び足音を残して去っていった。泥棒はフツと息を吐き出して再び部屋の物色を始めた。

そして壁際に近づいた時、いきなり低い音が響いた。

「Gyuiuyuiyuiouyuioui」

壁が砕け、そこから伸びてきた腕が泥棒の両肩をがっしりと掴んだ。

「うおっ！ な、なんだ！」

泥棒は思わず叫び声を上げる。だが、肩をつかんだ腕の力は緩むことなく、泥棒の両肩をギリギリと締め上げる。

「ギアアアアアアアアアアアアア！」

ミシツツという音と同時に泥棒は絶叫をした。そして、さらに壁

優しいおばあちゃんのおつかい

「おばあちゃん、いつてらっしやい」

「b b r y u u o o o o o」

ゾンビ老婆はよだれを垂らしながら、右手に持った買物袋を振り回して家から出て行った。

家から出てしばらく歩いたゾンビ老婆は、突然おもむろに地面にダイビングするとその場でじたばた転がり始めた。

それに気がついた感じのいい青年が近づいてくる。

「あの、大丈夫ですか？」

青年は手を差し出したが、ゾンビ老婆はいきなりそれに飛びついて手首を食いちぎった。

「ポビョヤアアアアアアアアア！」

青年は手首から血を噴出させながらその場に転がった。ゾンビ老婆は食いちぎった手首を吐き捨てると、なにもなかったかのようにその場から立ち去った。

そしてゾンビ老婆はスーパーの前に到着していた。

```

┌ i i r y u u u u u u u u u u !
└

```

ゾンビ老婆は大きなうめき声を上げると自動ドアに突進する。自動ドアが開く前にゾンビ老婆の体がそれに激突し、派手な音を立ててガラスが砕け散った。

[illegible]

ゾンビ老婆は割れたガラスの中で体を切りながらも勢いよく立ち上がった。それから買物かごを口に加えて店内に突進していく。

しかし、店内の客達はそれに騒ぐことなく、普通に買物を続けている。ゾンビ老婆は買物カゴを口でくわえると生鮮食料品売り場に突進した。

その先にはタイムセールで人だかりができてゐる鮮魚売り場。ゾンビ老婆はそこに突っ込み、何人かを吹っ飛ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2984y/>

おばあちゃんは優しいゾンビ

2012年1月9日22時46分発行